

中村素堂

先日東京駅にある大丸デパートの大きな室を占めて、墨蹟蒐蔵をもつて天下に誇る菅原通済翁ご自慢の常磐山文庫の宝物展が催された。お招きに甘えて往年の三越展以来の大展覽会を拝観するの眼福に浴した。国宝・重文と記された名品も名品。天下喧伝の名品を唾を呑む思いで遊覧し終わっても、大居士馮子振の国宝軸以外はことごとく臨済の墨蹟、他は歌切名品と天神像等であつた。

源流を同じくするといっても、黄檗禅の墨蹟は一本も見い出だすことはできなかった。これは墨蹟収蔵の立派なひとつの型で、骨重屋さんは黄檗は儒者もののように類別するし、ご所蔵の方々も大体そういう方々のようです——という。

これを儒者の書蹟の中において見ると、筆墨の調子はなるほど似たものはあるが、風神においては何か一格異なつたものを感じるのである。

良寛和尚は曹洞禅の人で、行実はもとよりであるが、詩歌と書をもつても近世僧門中屈指の存在である。この書の鑑賞も茶家者流の方よりは、人物と詩歌とによつて、そのすぐれた書も珍重されているのが現実で、どちらかといえは儒家文人型寄りなのではあるまいか。

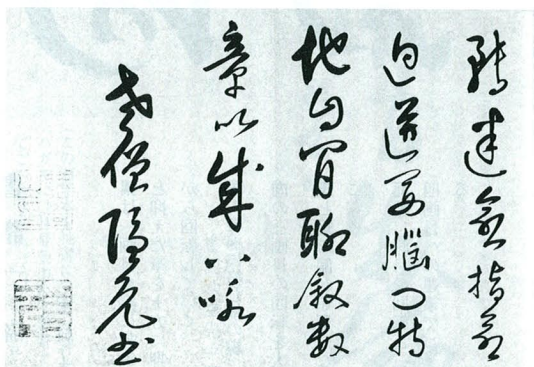
しかしいま普茶料理をなにごしという専門店でいただと、前後のところよく抹茶を出される。これは異法であるとして煎茶たるべしと説く人も多い。

洋食のあとさきで番茶が出るようなものかも知れないが、黄檗風といわれる一群の名僧墨蹟は、その筆者の行履において屹然たる話題に乏しいのか、筆鋒使転の間に颯爽たるものが不足なのか、別に

禅墨蹟の中には是非これが同じように見られるべきだといつたものでもないが、時代が下がって日本に開かれたこの一派のすぐれた墨蹟だけが鑑賞の場を異にしその珍重愛好者の類をややことにするのは、俗人には何か解しかねるものがある。

ご示教をいただければと、ふとこの隨筆の一端を記するものである。

〔大法輪〕昭和四十七年七月
〔筆間雜記〕中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。



隠元の書